

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 佐々木雄大

本論文は、バタイユ思想の中心的な概念である「エコノミー」にかかわる問題を、思想的な脈絡と、同時代の主としてフランス思想との関連で考察しようとするものである。そのため本論文は、これまではたんに「経済」あるいは「経済的なもの」というイメージで語られてきたにすぎない、エコノミー概念の内実を確定して、バタイユの思想を「エコノミー」という観点から一貫して理解する可能性を示すという課題に立ち向かう。

第一章では、西洋思想史における「エコノミー」概念の重層的な意味とその変転を辿ることによって、バタイユの「エコノミー」論のための予備考察が遂行される。それは一方で、「エコノミー」という語が「経済」という意味を担うようになったのがあくまで近代以降であることを確認するためである。しかし他方では、この「エコノミー」という概念が、西洋思想の中で重要な役割を占めてきたことを示し、その系譜の中にバタイユを位置づけるためでもある。第二章は、戦前から戦中にかけてのバタイユの思想的発展を、エコノミー論の生成過程として捉えかえそうとするものである。すなわち、「松毬の眼」草稿群における主体の二重の態勢、および地上の生物と太陽の生態学的関係、「浪費の概念」における有用性と栄光の対立、および生産的消費と非生産的消費の問題が『有用なもの』のなかで「エコノミー」として統一されることで、バタイユのエコノミー論が形成されていったとするのが氏の認定である。第三章では、『無神学大全』以降の著作が目され、同時代の思想との対決を通じて、バタイユに特有の「エコノミー」概念が生成してゆくさまが確定されてゆく。知と所有の操作が完了するとき、対象を領有する主体＝主人は解体し、非・知と贈与の主体＝至高者へと反転する。極限の体験のなかでエコノミーの外部として出会われる「不可能なもの」が贈与なのである。第四章では、この「一般エコノミー」の見地から、贈与・交換・供犠の意味が発展的に考察される。これまで混同されやすい概念であった三者の関係を選り分けることで、交換と供犠とが人間の社会において果たしている共通の機能が明らかになり、最後に、「不可能なもの」としての贈与から、「可能なもの」の総体としての「エコノミー」が生成する仕組みが明らかにされる。贈与とは、エコノミーを与えると同時に、そのうちにつねに開かれた「傷口」なのである。

本論文は、バタイユにおけるエコノミーという問題系を、思想的なパースペクティブにもとづいて、同時代思潮への配視とともに論じようとしたものである。なお未整理で未展開な部分を残しているとはいえ、本論文は一方ではバタイユ研究のあらたな礎を築き、他方ではエコノミーという人間的な生の基層を解明しようとするものである。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。